創刊の辞

立命館アジア・日本研究機構および立命館大学アジア・日本研究所は、2015 年 12 月に設立されました。研究所の施設は大阪いばらきキャンパス（OIC）に位置しているものの、本研究機構は全学組織であり、研究所もすべてのキャンパスを結んで、本学におけるアジア・日本研究を推進する役割を担っています。

もともと、2006 年制定の「立命館憲章」にもあるように、立命館は「アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する」ことをミッションとしており、アジア・日本研究を推進することもそのミッションを体現する活動となっています。そのため、OIC でも「アジアのゲートウェイ」機能や国際的なハブ機能を持って、全学のグローバルな教育・研究の推進に寄与することをめざしてきました。

アジア・日本研究所は、そのような文脈の中で誕生し、研究成果のグローバルな発信や国際的な研究交流をミッションの中に掲げています。そのためもあって、2019 年には 2 つの英文学術誌、すなわちジャーナルとアカデミック・ブレティンである *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* と *Asia-Japan Research Academic Bulletin* を創刊しました。両方ともオンライン刊行がベースです（ジャーナルはプリント版も発行）。さらに、前者は J-STAGE に収録され、後者は「投稿を随時受け付け・査読終了後直ちにオンライン掲載」という近年では国際標準の 1 つになりつつある方式を採用しました。どちらも、論文、研究ノートについては厳密な覆面審査システムによる査読を実施して、国際的な水準を維持する努力を続けています。

そのようなグローバル志向の中で、今回、和文の『立命館アジア・日本研究学術年報』を創刊することとなりました。その理由は、大きく言って 3 つあります。第 1 に、グローバル化や国際発信を重視することは、アジアや世界に向かって発信することだけではなく、その意義と活動を日本社会にも広く理解いただくこととしっかり結びついていなければならないからです。第 2 に、私たちが輩出をめざしている若手研究者たちは、日本での留学を経て高い日本語能力を有していることも多く、彼らにとっての国際発信とは英語のみならず、日本語と母語であるアジア言語をも用いるものであり、その発表の場が必要とされるからです。第 3 に、学部学生の皆さまに「研究者の世界」を紹介したいという思いがあるからです。高度情報化、ICT 革命、AI 時代、人生 100 年時代などのことばは、いずれも誰もが知識創造とかかわるような時代の到来を示唆しています。若い学部学生の皆さまにも、「学部－大学院－ポスドク－専門の研究者」という研究者育成のプロセスがあること、それを学内の研究機構や研究所、研究センターが担っていることを、本誌を通じて知っていただきたいと願っています。

誌名について申し上げると、これは 3 句から成っています。すなわち「立命館」「アジア・日本研究」「学術年報」ですが、これは立命館におけるアジア・日本研究について学術的な成果や現在進行

形の活動について毎年お知らせする、という趣旨を反映しています。ここで「アジア･日本研究」について、一言説明すると、英語では Asia-Japan Research となっており、Asia and Japan Studies（アジアと日本の研究）ではありません。これは、日本がアジアの一部で、アジアから外在化される形で日本をとらえるべきではなく、ただ研究関心の対象ないしは研究主体として日本も特筆すべきであるため、その両面を「Asia-Japan ／アジア・日本」と表現していると言うことができます。

実際に、アジアや日本に関する研究は学内でもたくさんなされていますので、それを広く年報でお知らせしたいと思います。特に、書評を見ていただくと、そのことが一目瞭然かと思います。各号の刊行前の２年間に出版された学内の先生方の著書・編著をできるだけたくさん書評に取り上げます。学内でこれだけの「アジア・日本研究」の広がりがあるということに、印象が新たになるのではないでしょうか。

また立命館には、立命館大学と立命館アジア太平洋大学（APU）があります。立命館アジア・日本研究機構／アジア･日本研究所は、これから APU の立命館アジア太平洋研究センターとも密な連携をしていきたいと考えています。すでに連絡を取り合っておりますので、次号にはそれが反映できるかと思います。

本誌の内容を一見すると、論文が東アジアの人文系の２本なので、分野的には人文・社会科学系なのかという印象をお持ちの方もいるかもしれません。実際は、そうではありません。是非、研究報告、研究の展望に関する提言、さらに収録されている書評を含めて、全体をご覧いただきたいと思います。本研究所のアジア・日本研究は「学際性」「文理融合」を重視しており、人文・社会科学系も自然科学系も広く対象としています。

次号へ向けては、論文でもそれ以外のカテゴリーでもそのことが判然とするような構成になるよう努めたいと思います。さまざまな分野の皆さまからのご投稿をお待ちしています。

今後とも、是非、本誌を含めて、立命館における「アジア・日本研究」の諸活動にいっそうのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いする次第です。

2020 年 6 月

小杉　泰
立命館アジア・日本研究機構 副機構長
立命館大学アジア・日本研究所長、編集委員長